

「現地を訪問して想うこと」

コース： 宮城県コース

参加者氏名： 竹島 英一

卒業年： 1987年 卒業学部：法学部

南淡路大震災(阪神大震災)のときには、京都に在住していたこともあり、被災地へ赴き会社の同僚を見舞ったこともあったが、3.11の東日本大震災時には、三重在住であり遠距離であったことから、若干ではあったが、身近に感じるところがやや少なかった。

今年の4月に被災地である仙台へ単身赴任で異動となり、復興のテレビ報道に触れる度に、自分の心に刻むために被災地を訪問すべきであると感じていたところにこの復興支援ツアーの存在を知り、応募し参加させていただくこととなった。

初日の学習においての気仙沼向洋高校 岸教諭の話で次の二点に深く共感した。
一つ目は、「ファーストペンギン」、つまり、誰かが一歩踏み出す勇気を持たないと全体が同じ過ちとなってしまうということ。

二つ目は、防災への意識は自助がなければ共助・近助はないということ。
つまり、自らが先頭に立ち、自らを防災することで回りを助けることができ、また、そうしなければならぬという防災への意識を強くさせられた講義であった。

また、『ささ圭』の専務 佐々木先輩での講話は、被災地では五つの被害への恐怖、つまり、「地震」、「津波」、「放射能」、「風評」、そして、「この災害が忘れられていくこと」の恐怖を5年半経過した今でも拭いきれたわけではなく、復興への道のりは、未だ道半ばあることを改めて認識させられる内容であった。

2日目の「開上の記憶」での語り部では、「辛い体験を語ることでこの災害を忘れないでほしい。被災者の願いは、私たちのような被害にあってほしくないということ。」と言う思いにあふれ、今でも涙ながらに、当時の様子を語ってくれた姿に皆心を打たれ涙を止めることができなかった。

この研修を通じて、防災への意識、被災地への思い、いつでもが震災前であるという心構えを学ぶことができた。

また、松島の情景や地元の食材等にふれることができ、非常に有意義なものとなった。

最後に、宮城県校友会の方々に大変御世話になりました。
この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。



車窓からの南三陸町 防災庁舎



開上地区 日和山